

親鸞聖人の六角夢想の偈について

名 畑 崇

一

親鸞聖人の六角堂参籠と六角夢想の事実は、親鸞聖人の吉水入室と妻帯問題に関して重要な意味をもつものであり、それは親鸞聖人の宗教信仰の方向を決定づけた要因である。したがって六角堂は、親鸞聖人にとって最も印象ぶかい想い出の場所であったはずであり、『皇太子聖徳奉讃』（七十五首）において、聖徳太子の行実として最初に六角堂創立をあげて、

太子の勅命帰敬して、六角の御てらを信受す、
皇宮の有情もろともに、恭敬尊重せしむべし^①
と讃仰せられるゆえんである。

およそ『皇太子聖徳奉讃』は歴史上の聖徳太子の事蹟に対する追慕と、聖徳太子の未来の有情利益の徳に対する感謝の念によって貫ぬかれており、中でも六角堂は聖徳太子が未来の有情利益のために創立された日本最初の寺院として重視されている。そして親鸞聖人の上に聖徳太子の利益として受けとられた具体的な内容が、六角堂参籠の

示現と六角夢想の告命であつたと理解される。

ところで親鸞聖人の六角夢想とは、いうまでもなく『親鸞伝絵』上ノ第三段に語られているものである。すなわち建仁三年^⑧辛酉四月五日夜寅時、聖人夢想の告まし／＼き、彼記にいはいはく、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を着服せしめ、広大の白蓮華に端坐して、善信に告命してのたまはく行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂文 救世菩薩善信にのたまはく、此是我誓願也、善信この誓願の旨趣を宣説して、一切群生にきかしむへしと云々^⑨（以下略）

ここで「彼記にいはいはく」として引用されているのは、高田派本山専修寺に蔵されている真仏書写の『經釈文聞書』の中に「親鸞夢記云」として引用された、

六角堂^ノ救世大菩薩、示^ニ現^{シテ}顔容端政之僧形^ヲ令^ニ服^{シメ}白衲^ノ御袈裟^ヲ端^ニ座^{シテ}広大白蓮^ニ告^ニ命^{シテ}善信^ニ曰^ク

行者宿報設女犯^ニ 我成^{リテ}玉女身^ノ被^レ犯^ス

一生之間能莊嚴^{シテ} 臨終^ニ引導^{シテ}生^ニ極樂^ニ文

救世菩薩誦^{シテ}此文^ヲ言^フ、此文吾誓願^{ナリ}、一切群生可^ニ説聞^ス告命^{（シタマフ）}、因^ニ斯告命^ニ、数千万有情^ニ令^ニ聞^ニ之^ヲ覺夢悟^メ了^ス^⑩

の文と内容が全く一致するから、『親鸞伝絵』の六角夢想の段は『親鸞夢記』に基づいて書かれたものであることが明らかにせられた。また近年、同じく高田派本山専修寺において、親鸞聖人の真筆と認められる「行者宿報」の四句偈文が発見せられた。かくて親鸞聖人の六角夢想は疑いない事実となり、改めてその内容が問われ、吟味せられるようになった。

六角夢想について宗学の伝統では、『親鸞伝絵』の叙述がそうであるように、専ら真宗興行の奇瑞、念仏弘興の表示として解釈されてきた。しかし近来はこれを主に親鸞聖人の妻帯問題——女犯の問題において把え、親鸞聖人

が当時妻帯について問題を抱いており、四句偈文が問題解決の重要な手がかりとなったと考えられるようになった。問題は「行者宿報設女犯」の四句偈文の意味であり、何故にそうした内容の偈文が六角堂の救世菩薩の告命として、突然に夢想に現われたかである。

まず最初に考察しておかねばならないのは、当時の六角堂についてである。

『六角堂縁起』によれば、六角堂は聖徳太子が創立されたものであり、本尊如意輪観音は太子七生の守本尊であったという。しかし六角堂の名が史上に現われるのは、平安時代中期藤原道長の頃からであり、六角堂はその当時に因幡堂、革堂、広隆寺、清水寺と共に洛中の験仏所として有名であった。そしてその後の観音信仰の隆盛に伴って、観音寺、蓮華王院、六波羅蜜寺、清水寺、長樂寺、感応寺などの観音の霊所の中でも、六角堂は清水寺と並んで特に崇信がさかんであった。このように当時の六角堂は験仏所として、また観音の霊所としてさかんに信仰せられたのであり、それは全く本尊如意輪観音のすぐれた靈験に基づくものであった。

六角堂の本尊如意輪観音については、『阿婆縛抄』九・如意輪部に、

六角堂日本最初伽藍也、聖徳太子七生御本尊也、尤可_ニ仰崇_一、件像持連、施願印也、石山像同_レ之_ト（中略）已上二臂像^⑥

とあり、それが石山寺の本尊と同じ左手施願印、右手蓮華の二臂如意輪像であったことが知られるが、『石山寺縁起』によれば、石山寺の如意輪は聖徳太子二生の本尊であるといい、同じく太子七生の本尊という六角堂の如意輪と共に、聖徳太子所持の靈仏として伝承されているのは注意してよい。また『阿婆縛抄』二百・諸寺略記上の六角堂の項には、

本尊二臂如意輪、救世観音是也、^⑦

とあって、六角堂の如意輪は救世観音であるといい、『拾芥抄』にはまた

六角堂金銅三尺如意輪
聖德太子

と記るされ、それが同時にまた聖德太子であると信じられていたのである。^⑨

一方六角堂の周辺の事情として注意しなければならないのは、『天台座主記』（青蓮院本）に、建保六（一二二八）年九月二十一日に山徒が山王七社の神輿を奉じて強訴におよんだことを記した後で、

又祇園、北野、鞍馬、長楽寺、靈山、六角堂等、山門、末寺末社同以閉門^⑩

とあり、建保六年の頃すでに六角堂が比叡山の末寺となっていた事実である。このことは『歎徳文』に親鸞聖人の六角堂参籠に至る経由を記して、

迺近対^{チクハシ}根本中堂之本尊^ニ、遠詣^{クハデ}枝末諸方之靈窟^ニ、祈^リ解脱之径路^ヲ、求^ム真実之知識^ヲ、特運^ニ歩於六角之精舍^ニ、底^ス百
日之懇念^ヲ之^⑪

とあるのに附合するのであり、親鸞聖人と六角堂との結びつきには、六角堂が叡山配下の霊所であったことが事縁の一つとなっていたのではないかと思わしめるのである。なお叡山と如意輪との関係で最も有名なのは公家三壇法の一と呼ばれた叡山の長日如意輪法である。この法は玉体安穩、四海静謐を祈願して行うもので、平安時代末期院政の頃に創始せられ、叡山の重要な行事の一つであった。ところで『阿婆縛抄』九二・如意輪部に如意輪法にふれて、

或了云、如意輪、公家三壇御修法、一壇也、観音中何殊修^{スル}此法^ニ哉、私案云、聖德太子者仏法最初主也、王法又以^チ十七条憲法^ヲ行^レ之^ヲ、而太子即観音後身也、以^チ如意輪尊^ヲ為^ス七生之本尊^ト、六角堂
観音是^{テリ}有^ニ所以歟。云々^⑫

とあって、論拠はいささか弱いにしても、如意輪法を聖德太子と六角堂の如意輪に関係づけて解釈を試みているの

は興味ぶかい。そしてこれは恐らく叡山と六角堂の関係を教義的に説明した最初の文献であろう。

二

さて親鸞聖人の夢想に現われた六角堂の救世菩薩がすなわち如意輪観音であることをまず前提として、改めて問
いなおされねばならぬのは夢想の四句の偈と如意輪観音との関係である。

行者宿報設女犯^ニ 我成^リ玉女身^ト被^レ犯^ム

一生之間能莊嚴^シ 臨終引導生^ニ極樂^ニ

七字一句で四句からなるこの偈の内容は、「行者が宿世の報いによって、もしも妻帯することになれば、（救世菩薩すなわち如意輪観音が）みずから玉女の身となり、妻となつて一生の間よくかぎり、臨終には引導して極樂浄土に生ぜしめるであろう」というのであるが、鎌倉時代初期に親鸞聖人とほぼ同時代に在世した金胎房覚禪が撰した『覚禪鈔』^⑤の四十九・如意輪下に、次のような注目すべき文を載せている。

●本尊變^{ズル}三王玉女^ニ事

又云^ッ（若^シ）發^{シテ}邪見^心、淫欲熾盛^ニ可^レ墮^ニ落^ニ於^ニ世^ニ、如意輪我成^レ玉女^ト、為^{リテ}其人^ノ親妻妾^ト、共生^シ愛^ヲ、一期生^ノ間莊嚴^ス以^ニ福貴^ニ、令^メ造^ラ無辺^ノ善事^ヲ、西方極樂浄土^ニ令^メ成^セ仏道^ヲ、莫^レ生^{スル}疑^{コトヲ}云々^⑥

文意は「（もし）よこしまな心がおこつて、色欲がさかんになり、道心を失つてしまうようなことになれば、如意輪観音がみずから變じて王の玉女^⑤となり、その人の妻妾となつて愛しあい、一生をけだかく幸わせにするであろう。そして数かぎりなく善事を造らしめ、命終の後に西方極樂浄土に仏道を成ぜしめるであろう」というのであり、これを「行者宿報」の四句偈文の内容と対比すると、両者は頗るよく似ているし、また語句においても類似している

ことが認められる。すなわち四句偈文の「我成玉女身被犯」は如意輪の文の「如意輪我成王玉女為其人親妻妾」と共通し、「一生之間能莊嚴」は「一期生間莊嚴以福貴」に、また「臨終引導生極樂」は「西方極樂淨土令成仏道」にそれぞれ該当している。これらの事実によって、六角夢想の四句偈文はおそらく右の如意輪の文に基づいて発想せられた、と考えられる。しかし四句偈文に「行者宿報」とあるのは、独自の内観に基づくものであり、また「我成玉女身被犯」の「我」は、原文では明らかに「如意輪」とあるにもかかわらず、「救世菩薩」と現わされているし、「一生之間能莊嚴」では原文の「以福貴」が略されているのが明瞭であって、四句偈文が如意輪の原文の単なる取意ではなく、そこに内観に基づいた独自の意味の介在を認めなければならないのは当然である。

ところで『覚禅鈔』の「本尊變王玉女事」の文の冒頭に、「又云」とあるのは前後の關係から推して、それが前節の「止雨風事」にひく「別本軌」をうけたものと考えられるが、如意輪の儀軌や本經の中にはそれに相当するものを未だ見出し得ない。しかし宝思惟訳『観世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法』の中には、

若^レ有^ニ善男子善女人、(中略)凡誦^ニ此呪^一、不^レ簡^ニ在家出家飲酒食肉有^ニ妻子^一、但誦^ニ此呪^一必能成就、誦^ニ此呪^一人^ニ不^レ須^ニ作法^一、不^レ求^ニ宿日^一、不^レ求^ニ持齋^一、不^レ須^ニ洗浴^一、不^レ須^ニ別衣^一、但誦^ニ皆悉成就^ス。

とあって、如意輪の陀羅尼を念誦するには、在家出家、食肉妻帯を問わず、その他時處諸縁をえらばないと説かれているし、また澄円の『白宝抄』には、如意宝珠に上中下の三品があり、中品の如意宝珠は自然道理の如来の分身であり、それは成生せる玉であり、成生せる玉とは能作性の玉であるという^⑧。凡そ能作とは不障礙の意であり、能作因の果を増上果というのであるが、宝思惟訳『如意摩尼輪陀羅尼念誦法』によれば、

若^レ常念誦^ニ一切諸縁^一無^ニ有^ニ障礙^一、當得^ニ氣力^一勇猛精進、捨^ニ身^一已後得^ニ生^ニ西方極樂国土^一、生生之處得^ニ宿命智^一。

と説かれ、如意輪陀羅尼の功德は一切の諸縁に無障礙なのであり、勇猛精進して命終の後には西方極樂に往生でき

という。ここで如意輪が弥陀信仰と結びついているのは注意されるが、如意輪と弥陀仏との関係は、如意輪の経典にしばしば説かれている。例えば菩提流支訳『如意輪陀羅尼經』には、

是成^ニ就世^レ出世^ニ間^ニ、二種^ニ藥^ニ処^ニ、増長^ニ福^ニ蘊^ニ、命終^ニ當^ニ得^ニ往^ニ生^ニ西方^ニ極樂^ニ刹土^ニ一^ニ

とあり、あるいは義浄訳『仏説觀自在菩薩如意心陀羅尼呪經』には、

善男子汝等勿^レ怖^{コト}、欲^レ求何願一切施^{スニ}汝、阿弥陀仏自現^シ其身^ヲ、亦見^ル極樂世界種種莊嚴如經廣説、并見^ル極樂世界諸菩薩衆^⑧一

とみえているのであり、本来如意輪の阿弥陀への親近性は非常に強い、と認めねばならない。そしてこのことは如意輪があるいは阿弥陀仏の脇士としての觀音菩薩に同化していくコースを予測せしめるであろう。

六角夢想と如意輪との関係でもう一つ注意したいのは、親鸞聖人の夢想到現われた救世菩薩が「白栴の袈裟を着服せしめ、広大の白蓮華に端坐して」（伝綏）いることである。前に指摘したように、六角堂の本尊は二臂如意輪であった。経軌によれば二臂如意輪の身相は、金色相、白紅色相、緋色相であるとせられるが、永嚴の『図像抄』（十卷抄）六・如意輪には、

又画^ク二臂^ニ菩薩^ヲ、白色^ニ結^ニ跏趺^ニ座^ニ白蓮^ニ一^ニ

と記してあり、二臂如意輪の身相は白色で、白蓮華に結跏趺座するというのである。この説にしたがうと、親鸞聖人の夢想到現われた救世菩薩、すなわち如意輪の形相は、まさに儀軌になつたものであると、いわなければならぬ。

以上の推測が正しければ、当時の親鸞聖人において大きな問題となっていたのは、やはり生命の苦惱——色欲のなやみであり、そうした有情の現実とその救済の問題において、如意輪（救世菩薩）の本誓が、親鸞聖人の心を強く抱えていて、その結果が六角夢想の啓示となって現われた、と考えてよいのではなからうか。そしてここでもう一つ問題にしたいのは六角堂参籠との関係である。

いうまでもなく、六角堂参籠の年時は建仁元（一二〇一）年であり、この年に親鸞聖人は叡山を下り、六角堂に百日参籠して後世を祈り、聖徳太子の示現にあずかつて、吉水に法然上人を訪ねて、その門に入ったのである。そして『親鸞伝絵』によれば、これより二年後の建仁三年に六角夢想があったことになるが、『親鸞伝絵』の六角夢想の年時については疑いがもたれ、正しい年時を何時に設定するかが問題となっている。そして現在では、これについて大別して二つの説が行われており、一つは六角夢想は建仁元年の六角堂参籠と同一事実であるという説であり、他の一つは六角夢想と六角堂参籠とは別の事件であり、六角夢想は吉水入室以後のできごとであるとする説である。この問題は親鸞聖人の内証の過程と相即するものであり、微妙な解釈をめぐる論考となつて、にわかにはいずれとも決し難い現状である。

ところで今ここで六角夢想が建仁元年の六角堂参籠と同一事実であり、その動機は主に色欲の悩みであった、という説にしたがうならば、前掲の如意輪の文をめぐる、あるいは次のような解釈を試みることも許されるであろうか。すなわち『恵信尼文書』に

やまをいでゝ、六かくだうに百日こもらせ給て、ごせをいのらせ給けるに、九十五日のあか月、しやうとくたいしのもんをむすびて、じげんにあづからせ給て候ければ、やがてそのあか月いでさせ給て、ごせのたすからんずるえんに、あいまいらせんと、たづねまいらせて、ほうねん上人に、あいまいらせて、

とある中で、「聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせ給て」の「聖徳太子の文」というのが如意輪の文であり、「示現にあづからせ給て」の示現の内容が六角夢想の四句偈文ではなかったかと思うのである。^⑤つまり六角堂参籠の九十五日の晩に、親鸞聖人は聖徳太子の文、すなわち如意輪の「発^シ邪見心^ヲ、淫欲熾盛可^ニ墮^{ベキニ}落^ス於世^ニ、如意輪我成^{リテ}王女^ノ、為^{リテ}其人親妻妾^{トニ}共生^ジ愛^ヲ」以下の文をむすんで、本尊如意輪に祈願し、その結果、夢想到如意輪（救世菩薩—聖徳太子）が現われて、「行者宿報設女犯」の四句の偈を授けたと推測するのであるが、いかがであろうか。

このように考えると、親鸞聖人の宗教信仰の展開過程の上に、如意輪は重要な意味をもつ、といわなければならない。しかし六角堂参籠と六角夢想のいずれの場合にしても、六角堂本尊は聖徳太子、あるいは救世菩薩として現わされており、それは如意輪としてではない。また『皇太子聖徳奉讃』には、六角堂について六首の和讃が収められているが、ここでも六角堂の本尊は全て救世菩薩として現わされ、如意輪の名は用いられていない。^⑥六角堂の和讃が『六角堂縁起』等に基づいて作られていることは明瞭であるが、『六角堂縁起』は本尊如意輪観音の縁起と靈験を強調するものであり、時代の六角堂に対する崇信も、すべてその靈験に基づくものであった。にもかかわらず、親鸞聖人の場合は如意輪の名を用いないで、すべて救世菩薩または聖徳太子として現わされているのは何故であらうか。このことは当時において、如意輪と救世菩薩と聖徳太子とは、同一視されていたという理由だけでは理解しがたいのであり、それは親鸞聖人の太子観の展開を、親鸞聖人の宗教思想の展開過程の上に発展的に捉えつつ、検討しなければならないであろう。

註

① 『親鸞聖人全集』和讃篇二三〇ページ

② 建仁三年は癸亥であり、辛酉は建仁元年である。西本願寺所蔵の『善信聖人絵』は「建仁三年癸亥」とする。

③ 『親鸞聖人全集』言行篇2・六〇七ページ

④ 『親鸞聖人全集』言行篇2・二〇一ページ

⑤ 『大日本仏教全書』一一七巻所収、平安時代末期には現行の縁起文が成立していたと考えられる。

⑥ 『同』三八・八八ページ

⑦ 『同』四一・三五九ページ

⑧ 『故実叢書』所収『拾芥抄』中

⑨ しかし一般には、六角堂の本尊は如意論として語られ、これを救世観音、聖徳太子と称する例は上掲のほかにはない。

⑩ 比叡山延暦寺開創記念事務局発行『校訂増補天台座主記』一七〇ページ

⑪ 『親鸞聖人全集』言行篇2・一七六ページ

⑫ 『大日本仏教全集』三八・八四ページ

⑬ 覚禪は康治二年に生れ、安元二年から建保七年までの間、観音寺、六条坊門富小路、綾小路、高野山東別所、祇園、西明寺、勧修寺浄土院等に居住して、『覚禪鈔』を選述した。

⑭ 『大正新修大蔵経』図像部四・四八〇ページ、『大日本仏教全書』四七・一八一ページ、但し『仏教全書』では、「又云」の下に異本は「若」字があるとしている。

⑮ 原文「王玉女」の「王」の意味が不明である。密教では如意宝珠を「成生玉」と解釈するから、「成王玉女」の「王」は「生」の誤写であるかも知れない。

⑯ 「本尊変王玉女事」の前に「止雨風事」として「別本軌云、若欲雨風止、取梟如木、（中略）長一肘加持百八返焼即止云々」とある。

⑰ 『大正新修大蔵経』二〇・二〇二ページ、なお『阿婆縛抄』九・如意論には、「宝思惟軌云」として、この部分をそのまま引用している。

⑱ 『大正新修大蔵経』図像部一〇・八六〇ページ取意

⑲ 『同』二〇・二〇二ページ

⑳ 『同』二〇・一九四ページ

親鸞聖人の六角夢想の偈について

②1 『同』二〇・一九七ページ

②2 『同』図像部三・二八ページ、なお『阿婆縛抄』九・如意輪には同じく、「画二臂菩薩白色莊嚴、結跏趺坐白蓮華」と記している。

②3 赤松俊秀氏著『親鸞』では、建仁元年の六角堂参籠は六角夢想と同一事実であることを種々の角度から論考し、六角堂に参籠して聖徳太子から与えられた偈が四句偈であり、「当時親鸞の悩みは性欲を中心とするものであり」、「苦悩のあげく、叡山を下って六角堂にこもって祈念せざるをえなかった。」としておられる。

②4 『親鸞聖人全集』

②5 細川行信氏「聖徳皇のめぐみ」（『親鸞教学』Ⅰ）では、「聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせて給て候ければ」の文について、「聖人は聖徳太子の文を結び、太子の示現を蒙られたという事実が知られる」とし、聖人が太子の文を結んで祈願された文と、その祈願に感応して示現にあづかられた文とに分別して考える必要がある、としておられる。

②6 親鸞聖人の著述を通じてみても、如意輪の語はみあたらない。ただ『観無量寿経集註』に、『観経』の「阿弥陀仏、神通如意」の文を釈するに、「如意」の語釈がしてあり、（親鸞聖人全集・註釈篇二・一三八ページ）これは『教行信証』信巻に、「光明寺観経義云言如意者」以下の「如意」の語釈と同一である。いずれにしても、それらは如意の語釈にとどまり如意輪について記すものではない。

附記

この論文は近く刊行予定の「大谷史学」一〇号に掲載する拙稿「六角堂考」の一部を詳述し、いい及ばなかった点を加筆したものである。したがって両者の内容が重複する点のあることをご容赦ください。